『海よ、海』におけるポストコロニアリズムの影

塩田　勉

『海よ、海』には、①イギリスの植民地時代の記憶を呼びさます語句、②植民地時代への連想を誘う典拠、③侵略の歴史をきざむ故地、④現代まで残りつづける「上から目線」や「支配者意識」をまとった人物など、いわば「ポストコロニアリズムの影」が散見する。そうした箇所に側鉛を下ろせば、いずれも深いところに横たわる宗主国意識の岩床に突き当たり、そこから人物たちを透かして見ると、見かけとは異なる構図が浮かび上がる。

①植民地時代の記憶に繋がる章句には、アラビアのロレンスへの言及（175）、「屋敷の一部を植民地化した」(17)、と言うチャールスの言葉や、植民地から掠奪した財宝の収蔵庫大英博物館を縮図にしたようなジェイムズの部屋の詳細な描写（172-173）がある。ジェイムズの死後、彼が蒐集した東洋関連の品々も大英博物館に収蔵されている（496,498）。

②植民地時代への連想を誘う典拠には、シェイクスピアの『嵐』、ジェイムズの口癖になっているベロックの機関銃賛歌（483）がある。『嵐』の舞台は、バーミューダ島やパタゴニアが擬せられ、プロスペロー（チャールズ）は、機関銃ならぬ魔法の杖で、原住民キャリバン（ペリグリン）や地精エアリアル（リジー）を支配していた。ベロックの機関銃賛歌は、アフリカのオムドゥルマンの戦い（1884）以降、イギリスの植民地支配を決定的にしたころに作られ、機関銃は、帝国の魔法の杖となっていた。

③侵略の歴史をきざむ故地は、チベットのクンブム（172）、インドのデラドゥーン（64）、アフガニスタンのカイバル峠（193）、シリアのダルア（175）など、かつて大英帝国が食指を伸ばし、侵略した故地である。作品では、陸軍の情報将校となったジェイムズが、これらの土地で暗躍したことが暗示されている（486-487）。

④「上から目線」や「支配者意識」をただよわす人物には、演劇界で、「独裁者」、「タルタル人」(37)、「ジンギスカン」(399)、と譬えられたチャールズがいる。ハートレーに対するストーカー行為や拉致監禁は、ハートレーが糾弾するとおりである（300）。しかし、優越者として無意識に振る舞う態度は、別の形でジェイムズにも見て取ることができ、チャールズとジェイムズの隠れた類似性を暴露する。

チャールズは、①ハートレイを支配し、②タイタスの命を失わせ、③ペリグリンに罪を犯させた結果、④演劇界を支配した魔法の杖を捨て、魔術師プロスペロを廃業する。

ちょうどそのように、ジェイムズも①大英帝国に奉仕するスパイとしてチベットその他アジアの民族を支配し、②ミラレパの命を奪い（447）、③トゥルパやミラレパに祖国を裏切る罪を犯させ（486-487）、結局、④ 魔術に堕した神秘主義を捨て、チベット仏教のワンダーランド（172-173）を離れるだけでなく、他国を支配した魔法の杖（機関銃）を捨て、機関銃に象徴される「グリーン・ジャケット」の隊員としての経歴に自ら終止符を打つ（473）。

チャールズとジェイムズという、一見、対照的

な二人の行動は、意識の底に潜在する支配者意識のプリズムを通すと、相似形をなす結晶構造を浮かび上がらせるのである。

使用テキスト

Iris Murdoch, *The Sea, The Sea* (London : Chatto & Windus, 1978)。